

俳諧古今抄

再撰貞享式
田之三

0-10

俳諧資料カード	
年代	貞享式
編者 (筆者)	支考
書名	俳諧古今抄
備考	田之三

(下垣内蔵)

下垣内和人
電話〇八三二七九六五番
〒737

再撰貞享式

日之記

恋の句此事

たゞしく我々の恋はてまの天の厚傍の詞
いぢの事や於よはくつらうと和をたす
いづくの帝は撰集しは恋と都あつた
あしをい連るは兩式より誰のちおよ
やう恋の詞とああやうあやうの句
はくしあうと我々の詞とああやう
ああやうの句とああやうの句

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

れ和の二角ありて能清よりよき名目あれは
よけれしてをこまき用一しこまきを未だ
とゆへ節法のの名きとあるはあふ未秋に柱
の去嫌おほく音年とこしつるはなりか
なれと未然のらねとふ一し或を無と能
こまき古抄のなまきい句論とて能清より下
のこまきとこしつる能きみとこしつるは
とこしつるのこまきとて未秋のまふあはれ
昔法よりつる時とこしつるはよきま
一用一しつるはよきまとて未秋のまふあはれ

のねあはれつるれともまはる名目とて
まふとあはれつるれともまはる名目とて
秋よりはるまきとて未秋のまふあはれ
のこまき名目ありはるまきとて未秋のまふあはれ
此用とてや貴賤よりつるは実を暑よりつるは礼
はるまきとて未秋のまふあはれとて未秋のまふあはれ
よき多用あれはるまきとて未秋のまふあはれ
こまきのまきとて未秋のまふあはれとて未秋のまふあはれ
能清の用とて未秋のまふあはれとて未秋のまふあはれ
冬とて未秋のまふあはれとて未秋のまふあはれ

二用ありし能活よりと名同ありし能の
係りかくのてしく一世の御公議と定観しお
たに多しよむしと也冬と御の令しく新制衣
多し〇今梅まらに古法より裕らひ能のひ能と
しひ能米とりひ能とひ能とひ能と一句を能
はる時つらと冬と北各同しして今式として通
也ふれとよけ能と二まよ二まよ中まよよつれ能係
と能とよし古例よりして一句を能ある時と
同系よご向まよゆのまよやぬ向はくぬ向
はるしご向はくまよご向まよぬ能也〇能梅まよに

者法の申よりある。とつひ掛。とつひ川物。ゆ遊
和歌連寄古法よありと能活よ今式の御公議
あれいけにと御供の例とかりして一句を能
時を波子能とありと一むむ分りよご向まよ能
あんまよへ能と能に二能ハ能活よ多用あれと
冬と古法はるしよよして去能の向まよ一能
はるく一能の用と能まよけ能お能く新制よ能
と全く古法の例を能よよありと能よ二能の
能評より一世の御公議と定観して用ると用
と例よ能人の能まよよよ

と新とす。こゝをさくらぬ。○をを朝日此
以燈より裕單し物之兩圓之兩圓水とむきあし酒と
共へて古抄よりさしきれとて水の陰深と稱され
いと詞も及さん古抄を汗と新も之れと
を各段向しとま向しとて船港のま語とされい
これとと兩用の才とていむ。川持とて二条より流り
て中遊の對されい。ま子も新も用とせ。○秋を
灯とす。ふれあり。ゆゆと清て。盆の年式とされ
灯とす。ついでなり。とま子も新も用とて。燈は
も威放しとされ。秋とす。りて。いと放とす。

例の之用とん。さるに中遊とて。詞のなり。川持
の右ねとす。ま向の新と。句端とす。ま秋の
と。用とす。例の象謀。より。○冬。燈
團。象より。燈と。は。て。さ。と。古抄と。お。と。も
と。富富の兩用。よ。し。時。と。足。と。と。お。方。も。か。さ。る
ま。櫓。と。か。より。冬。と。さ。る。山。水。此。用。よ。新。と。せ
燈。火。と。ま。子。と。を。作。の。式。と。て。今。衣。輝。子。と。句。神。と
よ。る。一。これ。と。夜。と。浦。團。踏。皮。此。中。の。ま。と。さ。り。二。用
と。さ。り。ま。子。と。古。抄。よ。り。神。と。冬。と。は。く。と。さ。れ。と。神。帽。子
と。し。と。新。と。さ。る。と。の。用。あ。り。ま。子。と。さ。る。と。一。衣。と

と扱へりてあつたれは船中を當りて
次一ありて用はあつたれと新解の
心むる各取らばあつたれと新解の
あつたれ及つたれ又あると老懐の詩毫も
年くや猿もさつたれ猿の面
けむらありて百年のこゝろあつたれ
歳日の詞あつたれと新解の心むる
可き格とやいふと新といひ新解は
いかに格といふと新制といふと今
の格の各目といふと

蓮二云けはのお月ねい白馬の類説と相あり
て先師の遺稿も教はたりてと先師の人和
り抑りてありて軍書より先師の心と子
句とて時の記りと新解ありて新の詞は
故新と富士草師の今對して新は一略の
作ありて貞を老人はとてと先師を
はくると各句ありてと新の心むる
あつたれと先師の心むる今とて新の心むる
と先師の心むる今とて新の心むる
いひ新とあつたれと新の心むる

「とてゝるのしきるらう作の飛客あんとて世
と例の象議ありて新解の一格とてあつたり
とらるに穿て永の初比あらん湖南の新書山
今ありてて浦や二子の記とて一ははくとも
各所と新の何はあれとてれすと新の味
かてく何て新解も何とてい句とて時
こそも子比服とほけて口字格もつて一は
はれとて為の減後よりりていくわが新解
あれはを賢とて空りよりあらんてと一は比

象傳より今日の孫おとらとんとて尊の服
とてゆりしけ解もやあつたりとて也▲之扱
とらるに先師の段はと新とても子もとて空かく
おれとの議論も相ゆる中よ各よあふ長長ホラの
特川宮より口字の特解とてあつたりとてぬと
解奥ハ新の特解とてあつたりとてぬと
とてとてとて世の特の字也 運二もかくら
はれと用ひとてい記と新の特解とて新記
とて字のまをともよ時とてかくるもて新
とてあつたりとてとてとてとてとてとてとて

ハ新のぶらひる名あつしんまゝに書とれはなむ
と服と起意の二格とい用あつしんこし練と相
と強くはこしと作れぬ字といつこ
の向と強りてふとねは教おの難あつしん一
の要諷とらてまりぬかくりあて浦の書も
け服の練の相も音向と時の奥と書して
つくもさくたれと服と書用のらてさくあつし
授さるも服のほはあつしんらとれ今此を
あつしんといひ強くと等しといふあつしん
今此を強しといひ強しと強しといふあつしん
今此を強しといひ強しと強しといふあつしん

此れらの名目ともお月も一とてやあつしん
と強き此を論ふれいせ

○四季の名類此事

中古より四季の名実にお月お月お月と申は
と書けお月お月お月お月お月お月お月
月て通用あつしぬお月お月お月お月お月
より四季の名実と申論し神祉御園の行は
る本も強の名類と強しと強しと強しと強し
あつしんといひ強しと強しと強しと強し

の附合と儘と一していつけらるるの用とある
物名もあましくあれい今北能潜は用なき物と
時代の用捨にやうなきとまじくせしむれば
右今論ある物とあけて今捨つることを加へ
しと併くくら我行はるる達の人ありてけし
名れと凡例とあり四月より十二月廿五日
まじく彼ら噫物と用捨して今細め亦同じ
あつてもやとせらけし式の制をみるべし或は
しと秋冬とし二季の同じやうなきる物に
とあつて少なきを加へておれと今式の加減と

し或は鉢裏と江地とし其長巻と服部とし
おとせれと今式の留りとし或は新舊遺
物とあり花よ時多とまじくあつるハせれと今式
の貴賤とし或は古おのり用と持て今式の
有用とあるせれと今式の蓄用とし今式を
新故のきとひして例の古式とわくはあや
ましくと温故知新とやうにまじはらなくと
連三季の両式より兼載京祇の持はゆるや
はして紹巴の六百ヶ條ありと巻書とあり先
序の巻とほくはるるも同じ身ふおんかかん

二千系一斬の所ありて一た一と通のるをきく
何のるべきにあらん何の向まき或る何んまを
一部の凡例とてきく一ま也二と子てたまの跡を
とあしと紙詰の例の事話ちりよりこをたよし付
の象諷と意ひいせし人の象議しやう也
まはく此用とて達とてまきせ

○春之部

即御食

世名ハ佳節ノ御食礼ナリけぬし四月ノ祓禊
ヨリ節事氏節人氏御食子ノ田名ハ俗習

ナリ或ハ二節ト云フ詞ハ禱ノ自衣ノ威儀ヲ止テ
臨時ノ遊ヲ云ヘリトワ或ハ朝物ト云フ詞ヲ之辨ノ
人ハ節ノ詞ト成ル世等ノ俗習ヲモ知ナリ本
ヨリ俳諧ノ世法ナリ諸國ノ俗談ヲ知ルニスレ

決雪

世名ハ古今ノ論アリテ大昔ハ春ト云フ中昔ハ
冬ト云ヘリ〇今接スレニ決雪ハ冬ニ用キ所以

ナリ雪ノ班ナリ形容ハ初雪氏云イ薄雪氏云ハ

春ノ雪ノ平白ナラシモ日影ニ散リテ決雪ナリモ

定ノ氣ノ決和ナリ故ナリ決雪ハ決レテ春日ト定レ

世等ハ例ノ加減凡例ノ當用氏云一キナリ

雪解

竹詞ハ古式ヨリ解ルモ消ルモ春ト成セト雪
消テ氏消カニ氏朝夕ノ日ニ結ヒ洗足ノ湯ニ
結タラシニ頌ニ春ト定メハ冬ニ用キ詞ナクテ附合
ル言ト成ル時アラシク夏ニハ解ルヲ春ト成シ消ルヲ
冬ト成ス時ハ消ル物ニ敵シテ消ハ解ルハ我ト解
ル故ニ冬春ノ道理ハ明カニ詞ニ用ノ自在ヲ
得テ此等ヲ當用ノ働トヤ云ハン去ト冬ノ節
ニハ断ルニ及ハス

陽火

此名ハ古式ヨリ新トアリテ諸抄ニ色々ノ説アリト
燃ルト詞ヲ添ヘス氏決シテ春ト定メキナリ鮮カケロフ

稲妻ノ説ハ連身ノ用ニシテ蜻蛉ノ説ハ蟹ノ子ノ
河内ニヤ○今辨スルニ物ノ散回ハカケロフ散回習月ノニ字ヲ用
テ同訓別用ト成スヘキナリコカケ散回ハ木陰ノ散回ヲ伝
習ハハヒレノ田各語ナリ或ハカケロフ散回ト云フ類ナリ然レ
ハ散回モ群ムラツクスモ散乱ノ助語ニシテ和漢ノ通用
トハ此等ノ為ナリ或ハ庄子ノ野馬遊ユウ弁ヲ引テ
遊糸ヲ陽火クモ同意ノ説アリト漢語ノ遊糸ハ條
語ノ用ニ非ス増テ野馬ヤハヲ以テ野集ノ説ハ何ノ俗習
ニヤ論スルニ足ラス或ハユウ遊トハ湯相訓ニテ和訓
モ例ノ覺束ナクユウ遊トハ連歌ノ詞ニテ何レモ

能讀ノ用ニ非ス去ト下トゆふと假名ニヤテハ指合
ノ法目ニモ用キヤカモろふニテハ海キ事也

海苔

此名ハ故実ナリ櫻海苔ト申海苔海苔ト陸
海苔ト和布有洛苔ト云類ハ總テ春日ニシテ

海松ハ但甘夏ナリトシ然ルニ雪海苔ト云物アリテ

例ノ如裁ヨリ冬ト成セル其故ハ冬ニ部ニ見ルニシ

葎類

此名ハ俗習ナリ薤ハ薤或ハ艾ト忽ト云イサ葱
或ハ角葱ト云ハ薤ハ根深ハ但冬ニシテ

鷄合

古抄ニ親ノ説アトト古抄ハ渡鳥ニタレト琴ノ彈ト
決レテ春日定キナリ鷄鳥轉片詞ヲ添スレテ春日ナリ

結花郭公

古式ニ郭公ノ事ハ花ニ結テモ堂ニ結テモ竹ノ
ト云リ〇今按スニ漢承ノ詩ハ杜鵑氏蜀ノ鵓

氏云テ何モ夏春ノ景物トハ幸ニ其例ヲ假リテ
夏春春ノ用ト成スキヤ本ヨリ昔ノ書ニ結ハ決シテ
春日定レ此式ハ例ノ如裁ナリ

木地爐縁

此式ハ新撰ナリ然レハ同爐ヲ甘夏ト成シ爐用ヲ
冬ト成シ今ノ爐縁ヲ春日成セル朝茶湯ハ

朝貞ノ例ヲ假テ秋ノ用ト成スキヤテ冬ノ家ニテ

〇 夏之部

若葉

古式ニ木ノ若葉ハ甘夏ト成シ草ノ若葉ハ春日
成シ青葉ハ總テ新ト成セルモノナリ然ルラ或抄
ニ花ト若葉ノ二所ニ若葉ニ花ヲ結テハ春日云々
甘夏云々何故ニ決テ又ヤ○今按スニ月花ハ凡雅ニ
一巻ノ飾ナレハ踏タレ物ハ如減シテ四季ヲ自由ニ配シ
ハ若葉ニ花ヲ結テハ決シテ甘夏ト定メ○猶按スルニ
世配ハ花ハ春日ナリ葉ハ夏ナリ實ハ本ニリ秋ナラ
其ノ葉ニ若ノ一子ヲ結テ若葉ヲ甘夏ト成セルニリ
若葉ノ春日ナリ道理ヲモ知レ然レハ花ハ春日甘夏ニ
跨テ花ニ郭ムラ結タルトハ入遠タル働テ成等

ラ如減ノ様ニ夏トハ云一ナナリ

残花

世詞ニ古今ノ論アリ然レ残字ハ其季ヨリ
世季ニ残字ハ残ト云レ道理ナレ花ハ本ヨリ

春ニ決シテ残ハ甘夏ト定メ惣シテ残葉残葉
ノ類モ古式ハ一様ナラ又故ニ汁只ハ十色ニ實ニ兼テ
百世ニ論ノ断レ時ナレ譬言ハ残葉ハ重陽ニ残レ
世残葉ハ何ニ残レキヤ残字ハ總テ其季ノ次ニ
取りテ世論ヲ残字ノ例トスレ秋冬ニ部ニ奉ルニ
世ニ名ハ和漢ノ遠アリテ詩ニ牡丹ヲ春日ト成
世歌ニ杜若ヲ春日ト成セレト中古ニ誹諧ノ如減

牡丹杜若

ヨリニ右ヲ其ニ用スニ初夏ニ花ノ少キ故トフ

松竹落葉

古抄ニ松竹ノ落葉ハ新ナリ常盤木ノ落葉ハ夏ナリト云レト松竹ハ何ニ常盤ナラヌヤ山階

ノ白情ニ殊ニ面白キ物ナリニ只ハ決シテ夏ト定ムレト去ト下落ルトハ詩ノ詞ニテ散ルトハ大和ノ凡雅ナリ譬ニ桐葉ノ重ク落テ彼ハ散ル事ニ非ス多シ染情ノ論ヲ知ラハ千式万法モ多シ明ナルレ

水芙蓉

此名ハ新撰ナリ芙蓉ハ和漢ニ秋ニ都ニ入ヌレト水芙蓉ト云フ時ハ漢ニ蓮ノ一名トワ然レハ傳ニ和ケテ水芙蓉ト續ス凡芙蓉名ニ水

ヲ結スル散ルト云フ詞ヲ添テハ決シテ夏ニ用キナリ秋ノ芙蓉ハ陸ニ咲テ凋テ散ラヌ物ナラズ凡類ヲ句作ノ凡例ト成スキナリ

老萱

此名ハ全ク新撰ナリ然レ凡老萱トハ本ニリ漢家ノ詩ニ出テ或ハ狂萱凡乱萱凡總テ暮春ノ物ナレト例ニ今式ハ加減ニリ殊萱ハ勿論

ニテ老萱モ夏ノ名ト成サハ萱ニ老ノ感情アリ凡雅ハ例ノ淋敷味ト云レ此名ハ家談ニ據ルナリ

萱附子

此式ハ例ノ當用ナリ○今按スニ萱子ハ春ニ葉立テ夏則ハ六月ノ間ニモヲ見テ冬

至ノ比ニ鳴習フ故ニ管ノ子ニ鳴字ヲ結テ冬ノ季
トハ成セルナリ然レハ甘夏ハ尚習ニテ或ハ引鳥ノ
親ニ附テ或ハ笛ヲ吹テ引音ヲ教ヘ之誓古ハ甘夏
ノ尚トシハ附子ハ決シテ甘夏ト云イ笛ヲ結テモ甘夏ト
知レシ月ツキホレヒイ星日ツキホレヒイナリト引声ヲ取上ノ管トセリ

鳥巢

鳥巢ニ鳥ト都鳥トテ加テ水鳥ハ總テ冬トシト
此ニ鳥ハ歌道ノ秘夏トシハ夏ニ記サスト書捨テ
例ノ子細モナク執ナリト云ヘリ○今接スルニ都鳥ハ
指テ能諾ノ用ニ非ス増テ秘夏トシハ論ニ及ハス鵲
ト云イ鵲ト云ルハ本ヨリ水鳥ノ用アルハ巢ヲ結テハ

夏ト決スレ然レニ鳥ノ浮巢ト云ハ古式ニ執ト成セル
夏ハ水中ノ草ニ巢ヲ擲メハ水ノ増減浮沈テ四ノ子
モ其候ニ捨置ク故ニ道理ヲ附テ執ト成ヒト鳥
右巢ハ總テ去物ニテ其巢ヲ掛ル時ハ甘夏トシハ
浮巢ハ決シテ夏ト定キヤ巢ニ用ナキハ句作ニ
依ルレ鳥ノ別名ハ冬々ノ部ニ論アリ

非羽翠

此鳥ハ詩ニ各アリテ古抄ハ渡鳥ニ入タレト夏ノ谷
川ニ木陰ヲ傳テ決シテ夏後ト云ハ川蟬トハ後名ナリ

沖鯨

此名ハ俗目ナリ或ハ海邊ノ別在ト或ハ船遊
ノ時ニ魚ノ新敷ヲ称スレ決シテ極暑ノ各用

ニテ世等ヲ例ノ貴賤ト云キナリ

況 世ニ只ハ草芥ノ亦同ニ多ハ秋ノ季ト成セルハ
素 察スルニ世ノ字ノ惑ニヤ言及ハ涼ヲ好シ秋ハ冷

ヲ惡ム天地自然ノ道理ニシテ世等ハ言及ト決シ
物ニテ古今ノ遠トハ天理ノ次女情ヲ論スニテ文字
言語ノ名ヲ認ル故ナリ是ヲ千式ノ凡例ト知ナリ

○秋ノ部

花白田

佛舎ニ正花ナリ春ナリ細ニ言及段屋スハ種ノ
理屈アルト世分ニテ四百方能ナリト云ヘリ如何ナリ

秘古又ニヤ知ラス○今據スルニ花壇モ花畠モ決シテ

秋ニ定キナリ花園ト云ハ州花ニ似タシ花園トハ

仰向キ畠トハ俯向ク多ク俳諧ノ次女ト云テ種々

ノ理屈ハ今ノ用ニ非ス世等ヲ今式ノ有用ト知レ

桂ノ花

世名ハ今ノ常用ナリ古式ニ春ノ季ノ説モアルト
地下ノ桂ハ花ノ用ナリ和歌ニモ月見光ヲ讀スル

例シテ月ノ異名ト成シ秋季ト定ルハ勿論ニテ

四季ノ詞ヲ結フ時ハ四季ノ月ニ用キナリ然レハ

有明 既望ノ名ニ例シテ日モ星モ二句云ク植物

ニモ二句云キナリ

鳥鵲橋

古抄ニ生類ニ非スト、
如何鳥ニ百去キリ

鳩吹

此詞ハ種々ノ説アリト
キヲ吹テ鳩ノ真似ト

紅葉散

此詞ハ古式ヨリ且散ヲ秋ト云イ散トハカリラ
冬ト云レト花ト紅葉ハ春秋ノ艶色ニ

花ノ散ルモ春トハ紅葉ノ散ルモ秋ノ若キリ増テ

冬散ル木葉ト云イテ枯テ色ナキヲ用トセリ此等

ヲ古今ノ用捨ニシテ例ノ且字ニ及向敷ナリ

柏散

此柏ハ傳余ニ説アリテ論語ノ松柏ヲ證文止

ヲ事竟ハ新ト成セシモ爰ニ散字ヲ結テハ決メ

秋ト定キナリ○今按スルニ論語ノ松柏ハ松ト柏ト

常盤木ニヤ然ルラ六書正詁ニ柏字ハ柏字ノ俗書

ナリトヤ去ルラ大和ノ俗習ニ柏ヲハヤト訓シ柏ヲハ

ト訓シテ此類ノ正俗ハ數多ナレト知テ誤ニ從フラ

因ハノ故實トハ云リ去ナカフ爾報ノ註ニ榧有美

實ニ而如栢トアレハ榧ニ榧テハ榧字ヲモ用ス榧ト

栢トハ異字同訓ト云レシ或ハ傳余ノ説ニ紅葉セ

故ニト云レシ桐葉ハ紅葉セ子氏和漢通用ノ秋季

ナリ物ニシテ我家ノ自名遣ハ新字俗字ノ二論

ヨリ古今ノ兩用モ正誤ノ二様モ能證ハ例ノ俗日見

從テ今日ノ用ヲ達スキナリ

椎裡栢

御筆ノ椎下ニ紅葉セ又木ナレ氏推トカリモ秋
ナリ或ハ葉モ此木モ秋ナリト云テ秋ニ用ル子細
ヲ叙セス然レハ栢ト入遠テ彼ヲ新トシ是ヲ秋ト忠
百世ノ惑心トハ世謂ナリ○今按スルニ推モ裡モ栢葉ノ
名類ハ全ク紅葉ノ妙法ニ非ス落ルトカ拾フトカ
宜ラ結テ秋ナルヲ運宜ラモ甘ナリト云レハ古抄ハ
如何トモ其故ヲ辨ヘス

新茗高麦

此式ハ例ノ貴散ナリ奈何トナレハ新ハ冬ニ
テ食フハ秋ナリ前後ノ働ヲ貴テナリ去レハ
茶ヲ摘ムハ春ニシテ新茶ハ頃次ニ甘マト成セハ速

ノ用ヲ知ル時ハ孔子ノ宣給フ不時ノ誡モ其時其物
ノ程ヲ知テ分外ノ珍奇ヲ好カレトフ

初鴨

此名ハ全ク新撰ナリ或ハ貴散ニ加減トモ云ハ
○今按スルニ奉膳式ニモ鴨ト並ナカラ貴見スル
所ハ秋冬ノ差別ナリ去レ見向ノ姿情ヲ論ハ初
ト云ハハ雅ヲ思ヒ初鴨ト云ハハ味ヲ思フ多ク天
目正云一ハ辟言ハ初ト音ニ喚ルハ味ヲ思フニ
鴨ノ冬ナルハ勿論ニ初字ヲ添テ秋ト成ス一ケ
ニ

野宮別

此式ハ禁中ノ行事ニ古式ニ此類ハ教多ナリト多
連歌ノ用ニシテ俳諧ノ平語ニ通用ナラン然レ俳諧

上下子上達ノ道ナレハ言ハル等ノ一各ヲ奉テ公家
殿上ノ例ト成寸ハ四季ニハ類ノ各ヲ透^{スクリ}来テ他諸
曲節ニ用ミトナリ去ハ野宮ハ後漢ト賀茂トニ在リテ
伴勢ノ齊備宮ニ移リ玉ヲ野宮ノ別ト云ハリト去ハ
羅旅ニモ哀傷ニ非ズ増テ意^ニ常ニモ非テ哀
ナル所モ多クハナリ

○冬ノ之部

枯尾花

此名ハ古今ニ論アリテ秋ニ云イ冬ニ云ハト枯^ハ字ヲ
結テ冬ト定シ其故ハ名^ハ之木ノ枯^ルヲ冬ト成シ

殘葉

名^ハ之木ノ散^ルヲ秋ト成セル散^ルハ色アリテ枯^ルハ色ナキ
故ナリ然レハ名^ハ之草モ其例ニシテ枯尾花ハ決シテ冬
也亦ハ諸抄ニ論アリテ傳^ハ華ハ重陽ニ残リテ秋
ナリト云レト桃モ昔モ其類ニ非ズ然レテ和歌
ノ公ホニ十月五日ヲ収テ殘葉^ハ宮中ト云レハ宮中ノ字
ニ及ハスレテ決シテ冬ト定シ也等ヲ加^テ秋ノ用ト云
ハシ殘^ハ字ハ總テ殘花ノ例ニ效ヘシ

竹鷲

此亦ハ全ク當用ナリ古抄ハ秋ニシテ雁^ハ鳥部
ニ入テト山雀日雀ノ類ニ非^ズテ竹鷲^ハ鳥部
物ニ連^テス民家ノ軒ニ馴^テ馬防^ハ傳^ハ水棚ニ

遊ユウニ声ノ清セイク久クハ殊シ更ニ寒ニ増テ春ハ歸ル汝ニ女
モ見ミ子シ決シテ冬ト定シ此等ヲ姿シ情シノ例ト云フ

木兔

此ミツク木兔モ例ノ新撰ナリ古抄ハ秋ノ部ニ入レテハ後鳥
ニモ非ス名也鳥ニモ非ス増テ鳴声ノ物ト實ニハイ實ニナラズ曆
一ニ故ニトヤ然ラズニ季ノ加減ト云フ夜鳴ク鳥ノ當用ト
云フ決シテ冬ト定シ或ハ鳥ノ部類ナカラテ新ト成セル
ニ用アリテ此等ハ古抄ノ文覺ト稱スレ

鵝

此ニ鳥ハ後各ノ火燒ナリ然ラ古抄ニ渡鳥ノ部ニ入ル
ト其名モ其言モ朝霜ノ氣色ト云フ秋ニ小鳥
ノ多クレハ又レ之部ニ跨リテ此名モ加減ト云フナリ

鳥

此鳥モ論セハ新撰ナリ御筆ニ鴻下鳥ト都鳥トラ
加テ新式ニ新ト云フ歌道ノ秘言ナリト書テ例ニ
其故ヲ曉サテ今日ノ用ニ立難レ〇今稱スル路鳥モ鴻
モ水ニ甘及冬ノ差別モ通レハ果ラ結スハ新トモ云フケ
レト鳥ハ鳴声モ寒ノ氣ニテ俗語ニ搔井氏云フナレ
ハ能諸ニ各目ノ自在ヲ稱シテ冬ニ用アラハ冬ニ
用キヤ然ラハ路鳥ノ部類ニ勝リテ例ノ新ト成リ
季子ト成リテ附合自當用ト云フナリ

鶯子

此名ハ古抄ニ鶯子ヲ結テ冬ト成セレトモ
鶯子トハ各目モ長ケレハ鶯子ナクモ冬ト定

レ彼ハ冬至ノ比ヨリ鳴習フ故ニ其ノ子ニ冬ノ用
 ハナリ増テ尊ノ笛鳴ト云ハ子ノ子ニモ及向敷
 竹名ハ俗習日ナリ鴨ハ性未ノ道ヲ定テ山ノ尾端
 ヲ越ル故ニトワ然レハ初鴨ヲ秋ト成レ鴨
 ヲ冬ト成セル名ハ殊ニ能諧ノ用ト云レ

綿入棉打

古抄ニ綿ノ言ハ分明ナラス或ハ直ニ綿モ木棉モ
 總テ冬ナリト云レト去ルハ附合ノ言アラシ綿
 ハ本ヨリ新ニシテ綿ハ綿扱ノ對ナレハ入字ヲ添テハ
 冬ト定レ或ハ棉打ヲ秋ト云レト綿ヲハ搗ト云イ
 棉ヲハ打ト云フ打ハ木棉ニシテ決レテ冬ト定レ

棉取新棉ノ外ハ秋ニ非入或ハ綿帽子ハ衣類ニ
 非スト云イ綿ニ海軍賜ヲ嫌フノ類ハ古今ノ透
 ナレハ論ニカハス然ルヲ綿ト木棉トハ附テモ若
 カラスト云テ蛭綿ト木棉トノ叙文アレト綿ト棉
 トハ異堅切ニテ音訓ニ替日ラヌヲ何故ニ附句ヲ
 嫌ヌヤ古抄ニハ世類アリテ皆々論スルニ暇アラヌ
 多ニ世綿ノ一名ヲ舉テカ法ノ例ト成サハ其外ハ
 推レテ知一キ古又ナリ

山路塔

世名ハ古来ヨリ論アリテ歎冬ハ山路ニ
 宛ルタ下和歌ノ題ニハ山吹ニ用事ナレハ頓

テ大和ノ故宮ト成レリ然レハ中古ノ式目ニ塔
モ落カモ同ク春ニ用タレトモ各ハ例ノ賞賦
村脩ノ雪ニ結トモ落塔ハ冬ト定レシ然ツトモ
落カハ漢ニ西夏鴻カ春自雪ノ詩ヨリ春自ト云ハ
モ直ナレトモ各ハ指テ俳諧ノ用ナシ落カハ祖
春ニレテ一物ニ用ノ例ト云キナリ

冬瓜

瓜名ハ俳諧ノ自在ニレテ冬瓜ト春ニ喚ビ或ハ
カモフリト訓ニ喚ビ中右ハ總テ秋季ト成セ
去レト幸ニ冬ノニ子ヨリ霜ヲ待テ賞スル物ナレハ
西瓜ヲ秋トセル加減ヨリ冬瓜ヲ冬ト定メナリ

雪海

瓜名ハ俗習ニレテ或ハ加減ト云キナリ瓜物ハ
北越ノ各産ニレテ海邊ノ山石向ニ降積ス
ル雪ヲ波ノ打浸ス柏子ニテ凝テ海雪ト成レリ
トフ然レニ雪ヲ里ト訓セシハ白ヲ青ト云レ美訓
ナラン〇今ハ按スルニ海雪ト各ハ春自夏ト波々レハ
雪海ト云フ以テ冬ト成サハ例ノ変誤ニ似ハスレテ
瓜等ヲ加減ノ當用ト云レシ

大根引

瓜詞ハ冬ノ當用ナリ大根ト略シテ音語ニ
讀レシ京ノ家ノ大根引ニ效フ一カラス牛ニ房
モ同シ各數ナカラ引ト云スレテ堀ト云フ且ハ名

八秋ト知キナリ〇今按スニ能諧ノ式同ハ新式據
 ラス古抄ヲ逐ニス今ノ日世法ニ遠子ハ其ハ座ニ温
 其時ニ從ヒ其故ヲ論シ其為ヲ明メテ自己
 ノ理ヲ屈ラズ在サシハ其ノ所ヲ一世ノ血氣議ト知り
 其所ヲ百世ノ明監ト知キナリ
 車之七云け式の夜用と始よ節の食の公式より
 終よ大振りの係習よりおのれは四十余條あり
 一或ハ連舞の有用あり能諧の可し用とす
 一或ハ古今の遠同とすたり或ハ多き節の
 加減とすあり早きをけ式とすたり千式

一方法の凡例きくんと其をきくんと階秘旨の微中
 を失ひて一筆万通の様変よりけ式の序詞
 一とるる達の人とえしひてあましく四事よの
 名れとあふはとと能諧の誤不誤も能諧の
 用可し用もさるゆへけ式と格別して自己のるは
 とひらきくんと百世の惑をそはめらる

〇能諧ノ假名はくひ此事

大和ノ假名遣とすより定々承々の物教より
 して作らるるは法ありたりとやと書ハ紹巴の

假名あるより。天文の比北極りありとせしむると
世くよひいさねて。或を故実とす。亦ありて。志お
とふと。此に。て。ま。く。撥字とて。ま。く。ぬ。し。あ。の。假。名
ある。は。一。應。字。の。類。字。の。音。と。を。ぬ。れ。い。訓。
あ。の。字。や。ま。ん。れ。い。何。故。と。撥。れ。い。あ。の。ま。は。告
ち。り。や。ま。書。の。志。と。い。か。や。と。い。あ。り。あ。月。を
假。書。の。抄。教。奇。一。一。例。の。及。印。あ。り。故。実
と。や。或。を。口。傳。と。す。亦。あり。て。字。と。い。へ。あ。り。と
く。あ。り。ま。の。こ。ま。く。法。と。い。い。法。と。い。い。ハ。ホ。ハ。中
より。通。音。より。入。書。と。ま。く。ぬ。し。あ。の。字。あ。れ。い

あ。り。し。ま。ふ。り。し。と。一。れ。と。ち。ん。ト。ん。物。の。名
て。ま。ふ。り。を。調。め。や。う。ま。あ。れ。い。と。ぬ。ら。ふ。此。ゆ。ら
と。此。と。ま。く。假。名。の。假。名。と。ま。る。一。ま。せ。は。り。あ。と
い。ふ。の。輕。重。より。た。と。と。口。傳。と。い。ふ。あ。ら。う。一。し。ん
假。名。遣。の。平。竟。と。書。法。の。字。形。と。音。韻。の。輕。重
と。け。ま。用。え。る。と。ぬ。れ。い。を。余。を。け。例。と。考。一。知。一
但。ア。假。名。の。輕。重。と。と。と。輕。と。白。圓。と。點。一
と。重。と。黑。角。と。點。一。二。様。を。平。仄。の。相。致。也。の。令。接
と。ら。れ。假。名。の。書。法。の。連。能。の。考。と。い。あ。り。て。連。音
の。假。名。の。あ。れ。能。階。と。真。名。の。あ。れ。い。假。名。と

古漢名と此配とを辨するにふのむなるか一則と
 ありふるを辨するにふのむなるか一則と
 とらるるを假名書の手文とみるべきこと書法
 の字は形かくげぬれらあはれぬこととせよ也
 なることとせよ一はけか一はせよ一は例の
 なるは假名にせよ一は假名にせよ一は假名
 かの扱と一知一もせ或は文句とせよ一は
 ち一なるも一信一なる一或は言語とせよ
 一なる一能一なる一なる一なる一なる一
 の信綴とあはれぬれらあはれぬこととせよ

字假のくまると考一なるなるなるなる
 同訓異用の假名遣あり一上よ用ひ中一用ひ
 下よ用ひとせよありお月もな假名遣のなる西
 いひぬいねとかはえ一づらのなる一なる
 新制のなるせあり一假名遣なるのゆはのなる
 なるなるなるなるなるなるなるなるなるなる
 のなるなるなるなるなるなるなるなるなるなる
 なるなるなるなるなるなるなるなるなるなる
 例の明盤とせよ一なるなるなるなるなるなる
 なるなるなるなるなるなるなるなるなるなる

い
い
い

い
い

い

鯉類
鯉類

紅

又をサハシ

監

或はあつひの肝也

仁信

あつひのあつひすまひ

眠

あつひのあつひすまひ

侍

あつひのあつひすまひ

此

あつひのあつひすまひ

有

あつひのあつひすまひ

いれを故実也

○ ○ ○ ○
い い い い

東若云古法よりいの教さふといまくと
いふの二用よりきくいをいふといまくと

よ通ひのびをよよ通ふなせをねらむ

音通をいふへを唇の二音よ通へといま

くと唯牙の二音よ通ひ或は唇を

とよと齒音の二通ひていま千の横を

定まらむかきクケの定まらむ定まらむ

これら大和の國曲にては字よみ

きの助音おひてられい我の音律

此の法をきこひてまらむ折字をあれを

和訓よりきこむと恥とらふ一△角撰より

にづいをかくのそとく廻と實此を

よきを假名とし又句と言語とに動く
動くぬ款ありて物名をさるるなり動く
へ鯛醒のおとりのやせきうの言葉離の
おしお外く物名あれとも假名をうた
次とちとすはありて言葉をおふいとち
まことあまうと遊覧とちくるぬよふい
辰口春の次とちあり離の因かふの假名
あれといへち言葉の次とちあり但し
次とちとて歌書とす一節いとおとるれせ
みゆめとちおは中めとあれとおふの

れとあつてのやせきうに假名と動くと
動くぬをけふも教ふあれと言語と動く
又句と動くとちきとへいさくぬとちあり
のこもくも余しけ例よきとちせつとち
下の五品へ古書の假名はくひと散在
いふ語をりよなうん△摘撰いさくぬ假名
はくひとちおとち又句と言語とに或は動く
と動くぬと或ち書ると書くぬと或ち
上中下と用ると或ち軒堂とち心後と
或ちに傳とち故実とちとれに假名はくひ

の平書と和歌の撰集と武家の軍書
 と假名と直名と此をいふなり假名は
 しくまくとオとてよあるを其書の用
 あれいよぬるも漢字をがんにあり
 ころと今此は物ありと万葉假名を
 かこいりひらくまはく直名と申す故
 一子う二字よこいぬれあそえのる程
 とまふはて同類をの書への感作をれ
 一人きりわたり洞しそりされしはら
 されし能書の家よせられし假名は

の同流りあふおるいよあはるる
 詩号の好悪と撰集よるるしく字書
 此は治を屏風よるるすく故也詩は武
 の可啼ある圓角の二紋は軽重をま
 むれい字文万字は所よあまのいひを
 せくいひあはるるもあはるる多岐の
 ちよいあはるるれい角撰の書とよ假名
 一もれと用るるよ一發百中の的語と云ふ

○ 不 通 まじり 辨 まじり
 ○ と 直 まじり 蛇 まじり 故 まじり 故 まじり

運ニ云世ノ假名はふひとふふありて古名
はふひとふふとけりて新作の新制あり
らるる假名直名此とたりて大和詞ノ
助語とやうけて能清の文章此亦四條ノ
ふとふとけりて之後とらけい温觸を和子庵
の遺稿とありて彼ノ五秘の二子也む
え祿甲成の秘とや伊賀北西禁庵ノ
後撰ノ裏の撰集のほつに喜草のなめ
稿ととくりて十卷篇の註換ありて
前撰裏の直名文とて幻住庵記とあり

龜^{カメ}其^ミ楚^ソの文論ありて略^{リョク}云我^ガの^ノて^テ能^ネ清^{セイ}
の文章と和歌連^{ワカレン}とありて家^{イヘ}ノ格^{カク}
あんととふと漢^{カン}ノ四^シ六^{ロク}の文にありて^{抱子}
い海^{ウミ}ノ情^{セイ}秘^ヒ言^{ゴン}とふと今^{イマ}世^セの^ノ能^ネ清^{セイ}の^ノ平^{ヘイ}話^{ワタ}あり
例^{レイ}の^ノ古^コ名^ナからあんととふと今^{イマ}世^セの^ノ能^ネ清^{セイ}の^ノ平^{ヘイ}話^{ワタ}あり
形容^{ケイヨウ}と上^{ウエ}と能^ネ清^{セイ}の^ノ羽^ウの^ノ如^ニく^ク下^カと^{鰭^{ヒナギ}鯉^リの^ノ腹^{ハラ}}
と^{似^ニたり^トと}和歌^{ワカ}もあ^リと連^{レン}とあり
と海^{ウミ}ノ新^{シン}作^{サク}の^ノ原^{ゲン}中^{チュウ}狭^{キヤ}衣^イの^ノ曲^{キョク}とあり詞^ジと
似^ニたりと今^{イマ}世^セの^ノ能^ネ清^{セイ}の^ノ平^{ヘイ}話^{ワタ}あり
返^{ヘン}と返^{ヘン}とぬの^ノ差^サとあれいとてい可^イ用^{ヨウ}の^ノ例

ありとも假名とて其真名とるべしといふは
大和の文として今論する幻佳庵の記し古語
の詞とかりあはし候文の趣字ははねの雲の
異様東南のまじりて可方の用とはまじり
云思は楚北のまじりて今書の事練の指とまじり
まはまじりてあはしと字而る思とて今早計の
人此悔あしと改や奥のおるをの指とまじり
人さき此とては蹟とまじりて今早計の
今も假名真名のまじりて今早計の
と一万葉の假名あしといふも我も今早計

かきしとて今早計のまじりて今早計の
あしと楚北のまじりて今早計の
と我々の文章と論と湖南の月見
とはまじりて百世の文格も恥とるべし
まじりて今早計のまじりて今早計の
秘訓といふ今早計のまじりて今早計の
今早計のまじりて今早計の
今早計のまじりて今早計の
今早計のまじりて今早計の
今早計のまじりて今早計の
今早計のまじりて今早計の

の古をのびていふ事なりとの辨明はたゞの
例の字の名の二つをともさるる事なりと爲す
此人より中をいへば書林といはるる事なり
了すと爲す御の遺書にありてその解とるの
法をいへばその字のあはれはの奥意をいへば
遺稿といはる下此書にありとやまゝいへるの
廣狭と深とを御持と十六才子の核をいへり
ひらさらし書とて七十一の才の偏意をいへる
事と念ふこと遺書の虚実をいへる例のあはれ
おそむく事なりと今此式目の角撰よりてと撰ら

はして家談とすことらばや▲行授よりに假名
はひいへる和漢の助語は通用とてりて假名
と直名とをいへる事なりとての他より月見舞文
格とす事ありけりよ大和詞は助語とてりて
也

貞享式目之終

